

佐賀市 30 歴史探訪

しらひげじんじゃでんがく 白鬚神社の田楽

「田楽」は、田植えの時に調子を合わせて鼓舞する農耕儀礼として平安時代に生まれ、鎌倉時代にかけて娯楽的な芸能として発達し流行しました。後から成立した「猿楽」とともに「能」の原型となりましたが、室町時代には芸能としての主役の座を能に奪われました。現在の田楽は、祭礼として、また伝統芸能として、全国でも数少ない地域でしか残っていません。

そうした今に伝わる数少ない田楽の一つに、久保泉町川久保の「白鬚神社の田楽」があります。佐賀県内に残っている田楽はこれだけで、九州内にもほとんどなく、国の重要無形民俗文化財に指定された貴重なものです。記録に現れるのは江戸時代中ごろからですが、起源は平安時代にさかのぼるものと考えられています。

「白鬚神社の田楽」は、太鼓と笛の演奏に合わせて、あでやかな化粧を施した少年が「ささら」（編木）と呼ばれる楽器を緩やかに鳴らす動作が主体となります。この点から珍しい「稚児田楽」の一つとされています。同じ伝統芸能でも勇壮な浮立などと比べると、単調な動作の繰り返しに感じられるかも知れませんが、その点が逆に雅な平安朝の雰囲気を感じさせます。

平安時代には佐賀平野の各地で新たな荘園の開発が行われました。「白鬚神社の田楽」も、川久保周辺で始まった荘園の開発とともに、この地に伝わったものかも知れません。



あでやかな化粧を施した少年▶



▲「ささら」をふって鳴らす動作



▲白鬚神社

一口メモ

脊振山系南麓から流れ出る巨勢川のもと、久保泉町大字川久保字宮前に白鬚神社はあります。白鬚神社は、継体天皇の御代、近江国白鬚大明神の分霊を移したものと伝えられ、古くから村の鎮守として川久保の人々に親しまれてきました。毎年10月18・19日に秋の例祭典が行われ、その時に川久保の人々によって奉納されるのが、「白鬚神社の田楽」です。

